

教育上の課題と工夫

老年保健看護領域は、大学が推進する島嶼環境を生かして学ぶ臨地実習に2008年から取り組み、特に「生活者の視点」を強化してきた。しかし、2020年、COVID-19の感染拡大に伴う緊急事態措置として、沖縄県は島嶼への往来自粛を要請し、島嶼における臨地実習が展開できない状況が継続している。

代替策を模索するなか、実習連絡調整会議で「コロナ禍で学生の学びを確保するために実習施設と大学とで協働できること」が話し合われた際、公立久米島病院の副院長兼看護部長（津波勝代氏）より、遠隔実習の協力の申出があった。そこで、久米島病院看護師（以下、看護師）および老年保健看護教員（以下、教員）の双方の学びとなることも意図し、支援に課題を感じている事例の検討を4年次 老年保健看護実習Ⅱに取り入れた（下表）。選定された事例は、退院後の生活支援が必要な事例であった。事前準備は、看護師に支援経過を語ってもらった後、看護師と教員が「事例は退院後どこでどのように暮らしたいのか、そのときの課題は何か、課題に対して何をしたか、対象の反応はどうだったのか」の討議を重ね、教材作成をした。島嶼実習施設の看護師の参加による事例検討（5クール）に4年次全学生が参加した。学生は、「公的サービスが限られると自己決定が脅かされやすいと思っていたが、創意工夫次第で自己決定は支えられる」と学びを語っていた。看護師は、「新しい発想の提案をもらい、実際に支援に取り入れたい」と学びを語っていた。教員は、「教材作成を通して、生活者の視点は、公的サービスや生活を支える家族だけの調整でなく、身近な他者とその思いを細やかに捉えた具体的支援が学べる」ことを報告した（田場ら, 2021）。

各クールの遠隔実習の流れ※	
事前準備	① 事例の選定（退院後の生活支援が必要な事例） ② 教材作成（看護師に支援経過を語ってもらった後、看護師と教員が「事例は退院後どこでどのように暮らしたいのか、そのときの課題は何か、課題に対して何をしたか、対象の反応はどうだったのか」を繰り返し討議し、全体像・援助の方針・看護問題を整理）
遠隔実習当日（1日）	③ 教材をもとに、必要な情報についてのグループ討議 ④ 討議内容をもとにオンラインで看護師に質疑 ⑤ 質疑応答を受け、課題を解決するための強みを活かした目標とその具体策についてのグループ討議 ⑥ オンラインで目標とその具体策の発表 ⑦ 発表された目標と具体策の実行可能性について助言・指導

※1クールあたり、学生は2～3グループの10～16名であり、5クール繰り返された

With コロナに向けて

島嶼実習施設との協働で作成した教材は、高齢者の退院支援の事例であり、新たな教材として活用できる。同時に、島嶼実習施設の看護師は、学生実習に関与することでケアの学びを得ていたことから、学生実習における多様な協働のあり方を模索する必要がある。

引用文献：田場由紀他. (2021). 生活者の視点を学ぶ島嶼実習の強み—老年保健看護実習の教材作成プロセスから—, 日本ルーラルナース学会第16回学術集会 (WEB).